

# Whooops!

2017 WINTER Vol.15

多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ 発行

「TAKE FREE。」

アイヌの人々の踊りと音楽を楽しむ

インスタグラムでアートを見せる

マリー・アントワネット展

面白まんが

特集

「アートの壁」

ラスコー展

片岡球子の壁画

各地の壁画



「身廊」の空間。2頭のバイソンの足の重なり合いが立体感をもって描かれていることがわかる

## 特集 アートの壁

**壁**があれば何かを描きたくなる。家の壁を絵で埋めたくなる。そんな人が歴史上にはいっぱいいたらしい。昔は額縁なんてなかったから、殺風景な壁を絵で飾りたいと思えば、直接描くのが普通だったのだ。描けば宗教的な意味が生まれてくることもある。古くはポンペイや古代ギリシャ、敦煌莫高窟、日本の高松塚古墳やキトラ古墳。中世以降の教会でも壁画は定番だった。広義では、日本の襖絵を含めることも可能だろう。昭和レトロを象徴する存在になってきた銭湯絵を描く絵師は今もいるという。グラフィティは相変わらず世界各地で描かれ続けている。やはり人間は絵が好きなのだ。



《江戸の四季》の移設工事→ P.4



《クロマニヨン人》復元模型→ P.3



グラフィティも壁画のひとつ→ P.7

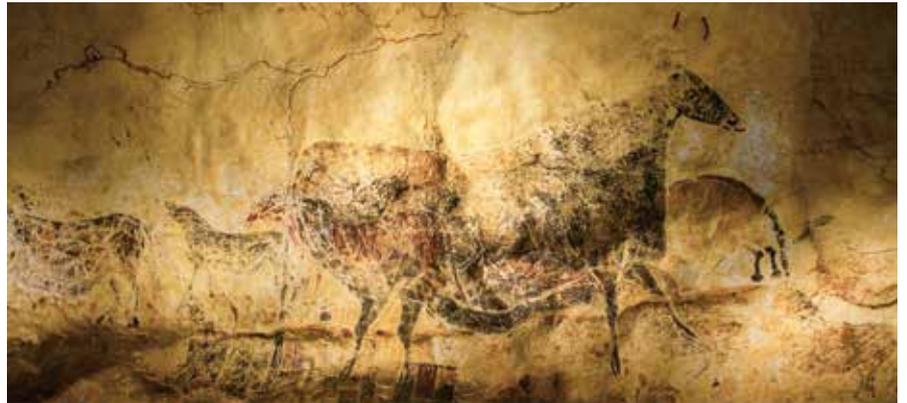
## 特集 アートの壁

## クロマニヨン人のアーティストぶりに驚く

約2万年前にクロマニヨン人が描いた壁画で知られるフランス・ラスコーの洞窟が、東京に出現した。上野公園の国立科学博物館で開催されている「世界遺産 ラスコー展 ～クロマニヨン人が残した洞窟壁画～」の会場内に、壁のレプリカが設置されたのだ。同展の4章の通路に入ると、暗闇の中、オレンジ色の光を受けてラスコーの洞窟が浮かび上がった。レプリカだとわかっていても、その精巧さに「実は本物ではないか」とつい思ってしまう。壁に近づくと、茶色い壁に黒で描かれた牛の姿があった。その黒い牛は、想像していたよりもずっとリアルで、生き生きとしていた。ほんやりと壁を眺めていると、オレンジ色のライトが消え、今度は蛍光物質を光らせるブラックライトが壁を照らす。すると、動物たちの輪郭が青い線で浮かび上がってきた。オレンジ色の光では気づかなかった、大地を走るウシやウマたちがたくさん現れた。

実際のラスコーでは、全長約200mの長い洞窟いっぱい、なんと600頭ともいわれる動物像が描かれているという。洞窟の中には大きく分けて7つの空間があり、それぞれ「牡牛の広間」「軸状ギャラリー」「通路」「身廊」「ネコ科の部屋」「後陣」「井戸状の部屋」と呼ばれている。この展覧会で再現されたのはそのうちの一つ、「身廊」の壁である。

この洞窟にはほぼ全域に動物が描かれているが、実はそれぞれの空間によって少しずつ様子が異なっているという。たとえば、入り口を入ってすぐの「牡牛の広間」は白い壁の空間だが、赤や茶、黄色などの顔料を使って、大きなオーロックスというウシを中心にシカやウマなどが色彩豊かに描かれている。対して、ずっと奥に位置する「ネコ科の部屋」では、ライオンなどネコ科の動物



線刻で描かれた牡ウシとウマ

が黒い色で、線刻によって表現されている。おそらくクロマニヨン人たちは壁の色や、差し込む光によって描く内容や技法を変えたのだろう。単なる落書きのレベルをはるかに超えており、「アート」と呼ぶにふさわしいと感じる。6章に展示されている動物の姿を模した彫刻からも、クロマニヨン人たちの芸術性の高さを垣間見ることができた。

クロマニヨン人たちは、いったいどのような意味や思いを込めて壁画を描いたのだろうか。それを知るための大きな手がかりを持ちつつもさまざまな謎を与えるのが、「井戸状の空間」である。ここに行くには、「後陣」からロープなどを使って5mも下に降りなければならぬ。ここでは様々な不思議、が見つかっている。まず、槍が20本以上、そして赤い砂岩製のランプが出土しており、どちらも壊れたところがなく非常に状態がいいという。壁には、バイソン(野牛)と倒れた人の絵が図式的に描かれている。ラスコーの壁画で人が登場するのはここだけという。それにも頭にはくちばらしきものがついている。人というよりは「鳥人間」とも言うべき姿だ。あるいは被り物をしているのだろうか。ここは儀式などをするための場であり、槍やランプはその際に奉納されたものではないかという説もあるそうだ。真偽はともかく、ラスコー洞窟の中でクロマニヨン人たちが何をしていたかを想像するのは楽しい。

洞窟壁画を専門に研究している五十嵐ジャンヌさんは、「古代のクロマニヨン人たちは、洞窟の壁が何かを描いて表すのに絶好の“キャンパス”だと知っていたのでしょうか」と話す。そのことが分かるのが、「身廊」の壁に描かれた2頭の背中合わせのバイソンである。五十嵐さんはこの絵を見て、2頭の足の前後関係がリアルなこと、凹んだ場所をうまく利用して本物の動物のような立体感を出していることに、とても驚いたそうだ。まるで2頭のバイソンがこちらに向かって迫ってきているように見えるというのだ。もはや「原始人にしてはうまい」といったレベルの話ではなさそうだ。表現意欲の発露があると言っているのではないかな。実際、現代人の目で見ても、アートとして十分楽しめるのだから。

取材・文・撮影・レイアウト＝増田啓志

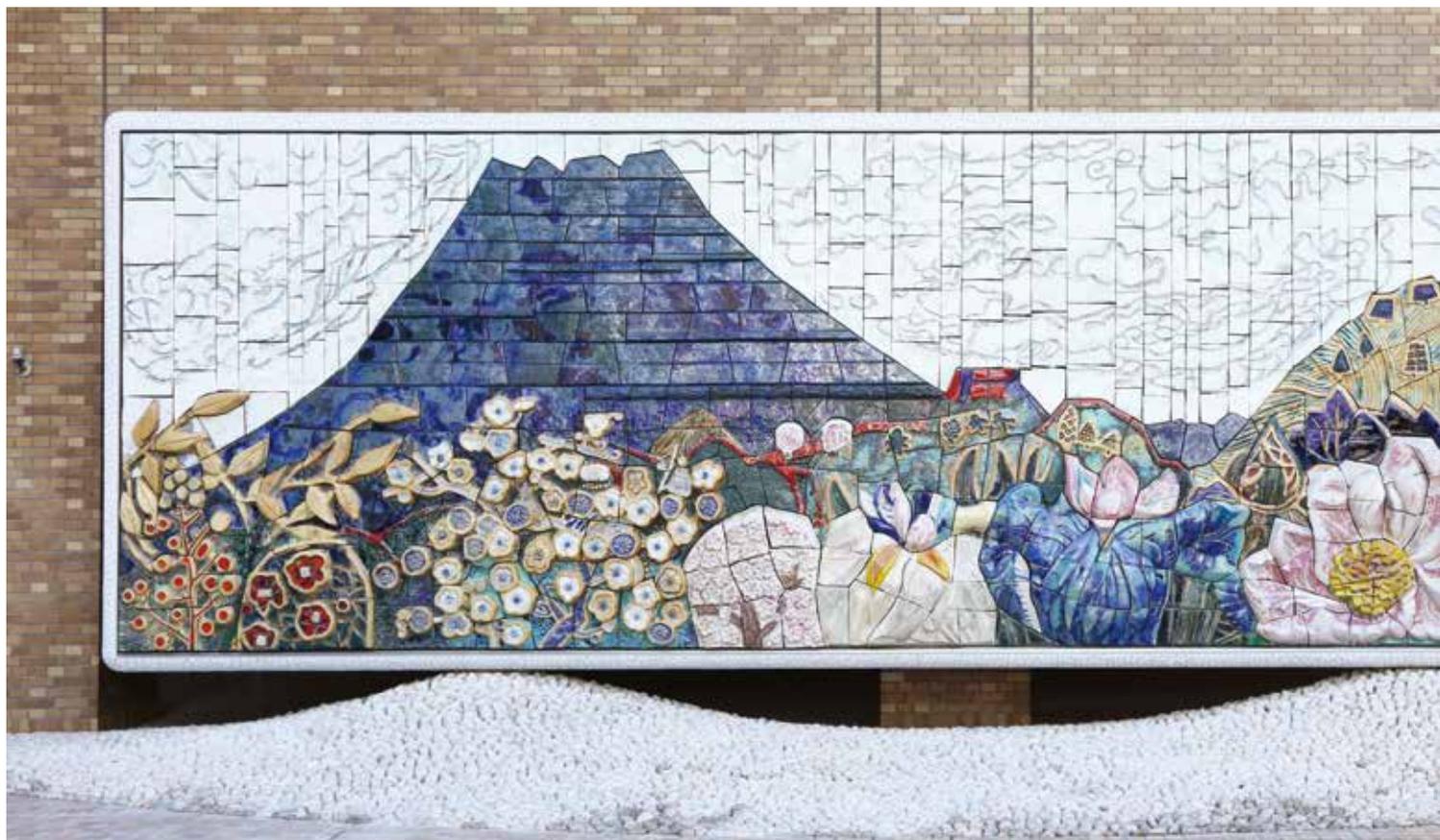


洞窟壁画の研究者である五十嵐ジャンヌさん

展覧会名：特別展「世界遺産 ラスコー展 ～クロマニヨン人が残した洞窟壁画～」  
会場：国立科学博物館  
(東京都台東区上野公園7-20)  
会期：2016年11月1日～2017年2月19日

特集 アートの壁

## 片岡球子の陶板壁画はこうして移設された



サンシャインシティ地下1階に設置されていた片岡球子作の陶板壁画《江戸の四季》が地上1階に移設されたのは、昨年1月15日のことだ。なぜ、そしてどのようにして移設されたのか。「壁」をテーマに取材をすると、興味深い事実が浮かび上がってきた。「壁画」から「やきもの」へと変容していたのだ。

**東**京・池袋の複合商業施設サンシャインシティに設置されている壁画《江戸の四季》が地下1階から地上1階へと移設されたのは、約1年前の1月15日にさかのぼる。まるで頂きから吹き降りているかのような雲と、深い青とも緑ともいえない中間色が味わい深い富士山を背景に、金に縁取られた花が咲き乱れ、画面の下半分を埋め尽くしている。

この壁画の原画の作者は、2008年に亡くなった日本画家の片岡球子。昨年公開された映画『シン・ゴジラ』では、代表作の一つである《めでたき富士》の本物が首相官邸の壁にかけられて話題になった。文化勲章受章歴もある。サンシャインシティで見られる《江戸の四季》は陶板壁画と呼ばれるものだ。原画を基に制作した複数の陶板をパズルのピースのようにつなぎ合わせ、幅14

mの大きな絵にしたという。

移設を推進した、サンシャインシティ常務取締役S・C事業部長の川島誠二郎さんは、かねてからこんな疑問を持っていた。「この壁画は通路の柱などが邪魔をし、遠くからは見づらい。なぜこのような鑑賞しにくいところに作ったのだろうか」。同じく文化勲章受章歴を持つ洋画家、田崎廣助の孫である川島さんは、サンシャインシティが竣工した翌年の1979年に入社して以来、ずっと気になっていたという。

状況が変わったのは2015年。地下1階の改修計画が社内で持ち上がったときだ。この壁画の処置も、議論の<sup>そし</sup>組上<sup>ょう</sup>に上った。費用がかかるため移設させずそのままにする案から、新しく壁を作って中に作品を閉じ込めてしまう案までが出たという。子供の頃に祖父の家に遊びに来ていた片岡球子と会ってい

たこともあり、川島さんは作家の価値をよく知っていた。そして、「今移設しないと、そのまま忘れ去られかねない。埋もれるのはもったいない。作家にも失礼だ」との思いが日々つもの。「どうしても残すべきだ」と社内を説得、機会を生かしてよりよい鑑賞環境ができるようにと移設を決めた。



サンシャインシティ常務取締役の川島誠二郎さん

片岡球子《江戸の四季》の設置場所  
東京都豊島区東池袋3-1 サンシャインシティ1階西街区



サンシャインシティ1階に移設された片岡球子《江戸の四季》(左)と移設の作業風景

実際の移設工事には、2015年の6月から11月までの5ヶ月をかけたという。工事を担当したのは、交通広告や商業施設の設計、駅で時折見かける壁画やステンドグラスなどの制作を手がけるNKBと建設大手の鹿島建設。工事はまず安全祈願式から幕を開ける。

作品は元の陶片に分解する。ばらばらになっても絵全体での各片の位置がわかるように数字を記入したテープを貼り、直径1.3mの円形の電動カッターを作品と壁の間に入れて一枚ずつ外していく。NKBパブリックアート部の江口一孝さんによると、「壁は平らではないため外すのが難しく、カッターの微妙な調整が必要だった」という。また、外した陶板がいきなり床に落ちて割れないよう、細心の注意を払いながら作業を進めたそうだ。

分解した陶板はウレタンマットで包み、NKBの工房「クレーレ熱海ゆがわら工房」へ輸送する。工房では陶板

の裏についているセメントを全て取り除いた後、タワシや中和洗剤で磨く。陶板は茶碗などと同じやきものである。磨けば完成当時の色が蘇るのだ。

割れたり欠けたりした陶板を修復し、ステンレス板などで補強した後、表面に撥水加工をし、工房の床に仮並べをする。ここで、美しさを取り戻した作品の全容が見える。

サンシャインシティ1階の新たな設置場所では、下から陶板を戻していく。パンチングメタルという金属の壁にアンカーとフック、そして接着剤を使って固定する。ぴったりと作品が収まったら作品の移設は終了。後は除幕式を待つことになる。

この移設では、作品に新たなデザインの概念が投入された。ただの壁画ではなく、やきものとしての存在感を強調したのだ。江口さんによると、陶器の釉薬の部分にできる貫入と呼ばれるひび割れ模様をあえて作品上に表現し

てやきもの感を出し、さらには下に白い玉石の山を二つ作ることで、全体を一つの立体作品として見せるようにしたという。片岡球子という平面作家の絵が壁画であることを飛び越して立体作品になったわけだ。

玉石は、神社などの神聖な場所に敷かれているものだ。富士山は信仰の対象にもなっており、その存在も自然である。一方、咲き乱れる花々は、横から見るとかなり立体的に盛り上がり、画面を突き破って空間に咲き始めそうにさえ思えてくる。はたして、花は富士山や玉石がなす神聖な空間への入り口である鳥居のようなものとして存在しているのか。移設し、やきものとしての味わいを見せ始めたこの壁画は、雄弁にさまざまなことを物語り始めたようだ。

取材・撮影・文・レイアウト = 椋田大揮



大分県別府市の JR 東別府駅近くにある東町温泉の壁画。制作したのは、イラストレーターの網中いづるさん

ピカソ風のシャッター (東京都江東区高橋)



名古屋市の一隅から



名古屋市の一隅から



愛知県豊橋市水上ビル商店街の一隅から



名古屋市の一角から

特集 アートの壁

# 各地の壁画

壁画は普通、描かれたその場所から動かない。そのため、描き手と同じ場所に立って鑑賞することができる。なぜその場所に描いたのか、周囲の景色を見ながら考えてみるのも面白いだろう。そんな壁画のある各地の風景をご紹介します。

文・撮影 = 榎山亮、小川敦生  
レイアウト = 榎山亮



大分市で2015年に開かれた「おおいたトイレナーレ2015」で繁華街にある飲食店「二代目与一」のトイレに描かれた壁画（部分）。作者の宮崎勇次郎さんは大分市で銭湯を営む家に生まれ育ち、東京の美大に通っていたころ、銭湯絵の絵師に手ほどきを受けたことがあるそうだ



パウル・クレー《ティンパニ奏者》を模した農家の壁画。スイス・ベルンのパウル・クレー・センターの道路を挟んだ向かい側にある

## TAMABI REPORT

# AINU ARTIST ToyToy (小川基)

## アイヌの人々の踊りと音楽を楽しむ

本学芸術学科の「音楽のアーカイヴ」の公開授業のために、アイヌミュージシャンでアーティストでもある ToyToy (小川基) 氏が昨年 11 月来校した。ToyToy 氏はホリッパという踊りやムックリ、トンコリという 2 つのアイヌの楽器の演奏を通して、現代の人が忘れてしまった音楽の本質を伝えてくれた。



トンコリを演奏する ToyToy 氏

本学八王子キャンパスのグリーンホール前の芝生に学生たちが作った円の中で、1人の男性の音が響いた。

「ホイヤーホー、エッサホー」

彼の音頭に合わせて、学生たちは跳ねながら男性の周囲を回る。手拍子をしながら自由なタイミングで短いフレーズを歌い踊ることで不思議なリズムが生まれ、そのうちに体が温まってくる。

これは、アイヌの人々の間に伝わるホリッパという踊りだ。中心の男性は ToyToy (小川基) 氏、アイヌ出身のミュージシャンであり、アイヌ文様の切り絵を作るアーティストでもある。

ホリッパの肝は、たくさんの人々の間で気持ちをシェアすることだ。楽しいことがあったとき、その気持ちを輪の中に放り込む。今度は別の人が放り込まれているものを輪の中からもろう。そして楽しく感じたら、また輪の中に放り込む。アイヌの人たちは、こうして次々にシェアを繰り返しながら力強

く地面を踏むことで、悪い神を追い払っていた。「昔のアイヌの人たちは、火の明かりしかないような世界でホリッパを踊り、みんなで気持ちをシェアしていた」と ToyToy 氏は言う。

教室に移動した ToyToy 氏は、アイヌの人々が使ってきた 2 つの楽器、ムックリとトンコリを披露した。ムックリは片手に収まるほど小さく、単音しか出ない。ムックリそのものからは小さな音しか出ない。だが、ToyToy 氏がかわえると、口が共鳴体となり、大きくて豊かな響きが広がった。

トンコリは細身の撥弦楽器だ。これも楽器そのものは、小さな弦の音しか鳴らない。しかし胸に当てて爪弾くと弦の震えが演奏者の体に伝わり、楽器と共鳴して大きな音が鳴るのである。アイヌの人々の楽器を演奏するには、体と楽器を一体化させる必要があるのだ。

これらの楽器から出る音は、いろいろな自然の情景、例えば雨だれの音な

### AINU ARTIST ToyToy (小川基)

トンコリ奏者、アイヌ文様切り絵作家、アイヌ文化継承者。

ToyToy (トイトイ) とはアイヌ語で「土の魂」の意味。

どを表現する。人と一体化した楽器で自然を描写する。アイヌの人々の生き様を表しているようにも思える。ToyToy 氏がトンコリを爪弾きながら歌い始める。すると、まるで子守唄のような穏やかな空気が教室に満ちてきた。ムックリのように音階がなくても、トンコリのように大きな音が出なくても、いい音楽は生まれるのである。

アイヌの人々の歌は、歌詞を間違えてもいいという。人と一緒に好きなタイミングで繰り返しのフレーズを歌っているうちに、自分がどこを歌っているのかわからなくなることもある。それでも、そのままたくさんの人と声を重ねながら歌っていると、自然に楽しくなってくるという。疲れたら休み、疲れが取れたらまた輪に復活してもいいそうだ。何と自由なのだろう。大切なのは、気持ちをシェアすることである。音楽が果たす役割の本質がここにはあるのではないだろうか。



ホリッパの指導をする ToyToy 氏

取材・文・撮影・レイアウト = 増田啓志

# Whoops! 考 インスタグラムでアートを見せる

SNSがネットの世界を覆う中、写真や映像を投稿の前提とするインスタグラムが若者を中心に一大ブームを起している。文字がほとんどない写真主体の投稿は、アートの世界でどう活用されているのか。スマートフォンの小さな画面の奥に広がる豊かな森を覗いてみた。

今やSNSは多くの人々に根付いているが、インスタグラムは自分の写真を気軽に世界中のユーザーと共有でき、「いいね！」ボタンやフォロワー数によって自身の投稿が評価されるアート性の高いコンテンツだ。投稿の仕方は非常に簡単で、写真もしくは動画を撮影した後、加工機能で色彩やフィルターを調整するだけだ。自身の感性を頼りに、プロカメラマン顔負けのお洒落な写真の投稿が出来ることが注目を集め、若者を中心に一大ブームとなっている。

インスタグラム最大の魅力は写真や動画といった、視覚に訴えかけるコンテンツの投稿を大前提としていることではないだろうか。掲示板やブログといったSNSでも投稿できるものをあえて切り取って主体にすることで、感覚的で今までより一段上のグローバルなSNSが生まれた。文章を書いて説明しなくても、一目見ればそのものよさや作者の思惑を感じ取ることができる。地域や言語を超えて感動が生まれる点は美術と共通するだろう。

一口にインスタグラムの投稿といっても活用方法はさまざま。インスタグラム界には大手ブランドや有名施設のアカウントも存在するが、その多くは宣伝広告目的であ

る。宣伝広告を載せるアカウントという、商品や施設の押し売りをイメージしがちだが、インスタグラムの場合さまざまな趣向を凝らした投稿が数多くある。世界を代表する美術館のMoMA（ニューヨーク近代美術館）もインスタグラムを活用して施設の宣伝をしている。作品の紹介や施設内の雰囲気を実際に見せることで、実際にMoMAへ出向いたことがない人、遠く離れた場所で生活する人も気軽に作品を覗き、雰囲気を味わうことができる。美術作品を文章で紹介するのは限界があるが、むしろ文字情報がほとんどない状態で写真を見せられると、自然と想像力を働かせて鑑賞しようとするものだ。普段はわざわざ美術館まで行こうとしない人々にもカジュアルに楽しめる。敷居の低い美術館の入り口として、押し売り感を与えずに宣伝ができるのだ。

インスタグラムを活用している芸術家もいる。彫刻家の金巻芳俊氏である。一つの頭にさまざまな表情を持つ複数の顔の木彫人物像が代表的な作品だ。インスタグラムでは、インパクトのあるその作品の数々を惜しむことなく披露している。芸術家の日常や制作風景はなかなか垣間見ることができないが、使用される道具や木材、さらにはリアル

タイムで試行錯誤する様子や家族と過ごすプライベートな生活風景まで、インスタグラムで見ることができる。美術展に出向き、完成された作品を鑑賞するのは一味違った、芸術家の味わい深い鑑賞の場となっているのではないだろうか。

芸術家ではないが、インスタグラムをアーティスティックに活用しているのはモデルのるうこさんだ。インスタグラムのウェブサイトでは横に3枚ずつ、新しい投稿が増えると過去の投稿が下段に移動していくのだが、彼女のサイトではただ写真が羅列しているわけではない。一枚一枚の写真が繋がることでまた一つの新しい作品となっている。一枚一枚でも美しい投稿の数々が、投稿が増えるたびに浮かんで消えまた浮かんでくるといふ、緻密に計算されたデザイン性のある投稿を試みているのだ。

遠くの美術館を少しだけ覗いてみたいとき、憧れの芸術家の日常にインスパイアされたいとき、制作活動の輪を広げてみたいとき、アイデア次第でインスタグラムがアートの世界を少しだけ広げてくれるかもしれない。

文=小林真弓 レイアウト=小川教生





エリザベト＝ルイーズ・ヴィジェ＝ランと工房『フランス王妃マリー・アントワネット』(1785年、ヴェルサイユ宮殿美術館蔵 ©Château de Versailles (Dist. RMN-GP)/©Christophe Fouin)

フランス革命で断頭台の露と消えた王妃として知られるマリー・アントワネット(1755～93年)の生まれは、オーストリアのウィーン。当時のヨーロッパで大きな勢力を持っていたハプスブルク君主国の領袖であり、「女帝」として知られたマリア・テレジアの娘だったことが波乱に満ちた生涯につながったのは、誰しも認めるところだろう。何せフランスで後に国王ルイ16世になる王太子の元に嫁いだのが14歳の時。もちろん国際政治を見据えた政略結婚だった。

権力と権力の結びつきを確認する場でもある結婚式は、はたしてどんなものだったのだろうか。この展覧会では、結婚式の様子を描いた版画や祝宴で使われた華やかなテーブル飾りなどが展示されていた。荘厳な空間の中で行われた式を、改めて想像してみる。もちろん、後に処刑されることにつながる不穏な空

## マリー・アントワネットは フランスの ファッション・リーダーだった

生涯の浮き沈みをグラフに描いたらこれほどの落差を見せる女性もそうはいないだろうと思わせるのが、18世紀のフランスで王妃になったマリー・アントワネットだ。その人物名を冠した展覧会が2016年10月から森アーツセンターギャラリーで開催されている。ベルサイユ宮殿が企画・監修する展覧会を見てきた。

気などは、微塵も脳裏に浮かばない。

その人生が絶頂に向かうのは、1774年にルイ15世が天然痘で没した後だ。夫君がルイ16世に即位し、彼女はフランス王妃になった。

折しも、フランスのファッション界は華やかに盛り上がっていた。マリー・アントワネットはその中心にいた。この展覧会では当時のファッションの様子が見られる版画が展示され、髪の毛を高く盛り、複雑な編み込

みを施したドレスや靴、華やかなアクセサリ、ウィッグなどが、当時のマリー・アントワネットの存在感を浮き立たせる。いわば彼女はファッション・リーダーだったらしい。コルセットで下部を大きくふくらませた彼女の肖像画からも、秀でたセンスをうかがい知ることができる。

この展覧会で特に注目したのは、実際に使われていた家具や装飾品を用いて再現した「プチ・アパルトマン」と呼ばれている彼女の居室だ。王宮であることを考えると、思いの外シンプルに見えたが、プライベート空間である浴室にこそ彼女のセンスが映し出されていたのかと思うと、ファッション・リーダーぶりにも納得する。居室には図書室もあったが現在は失われており、この展覧会では設計図などをもとに、最新デジタル技術で再現していた。制作は、東京駅の3Dプロジェクションマッピングなどで知られ

る、クリエイティブカンパニー・ネイキッド。近年の美術展は、表現がとても豊かになったことを実感した。

資料の中で興味深かったのが、フランス革命の時期にスウェーデンのフェルセン伯爵と暗号で交わしたという恋文の一部(複写)だ。2人が使った暗号表も一緒に展示されていた。黒く塗りつぶされていた部分もあり解説に難航していたが、2016年1月、ついに明らかになったという。もともとはフェルセンが政治上の理由での使用していた暗号の転用と想像できるが、不倫の恋文にも役立ったわけである。

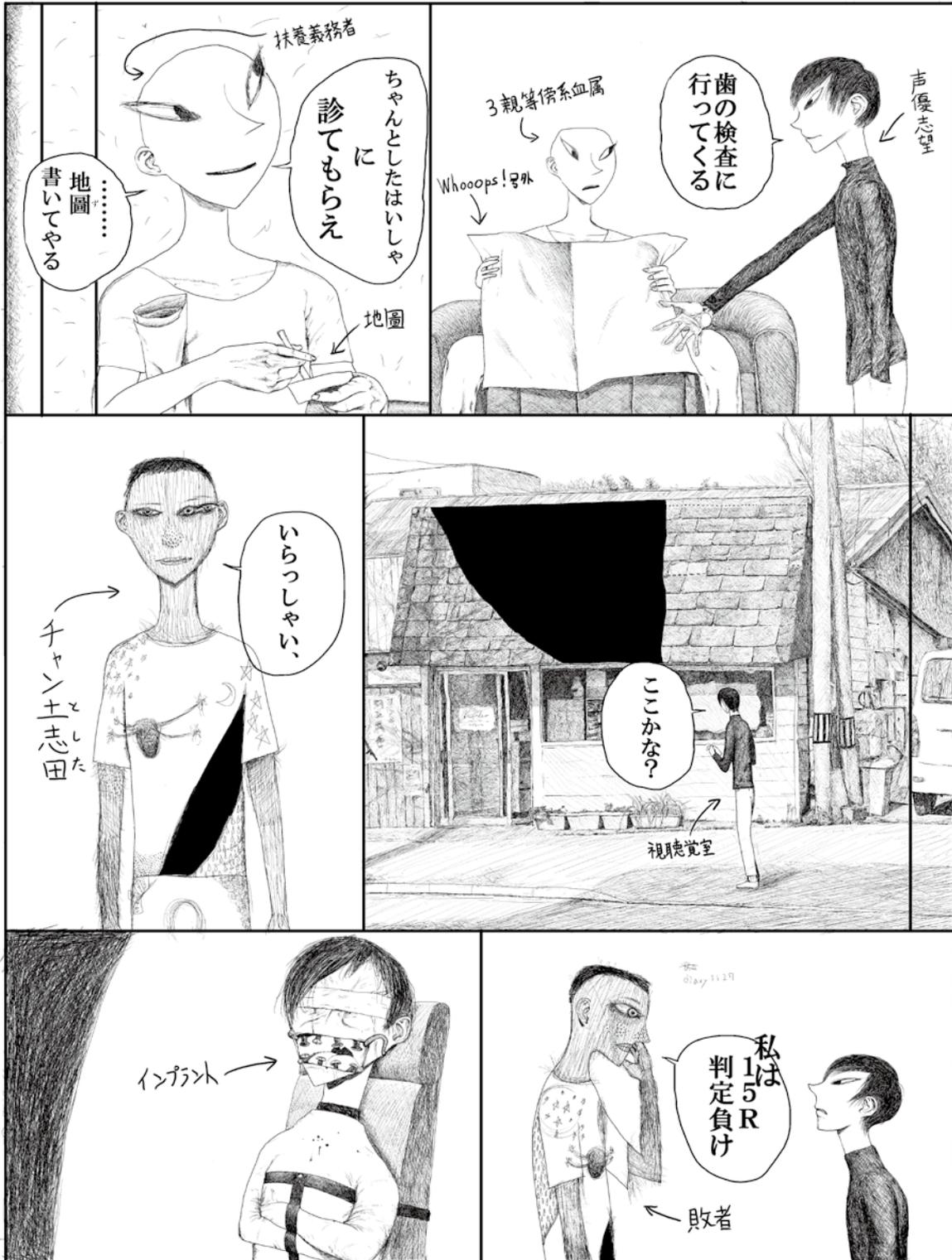
悲劇的な末路に関する展示も心に残った。後にルイ17世になるも後に非業の死を遂げる当時の王太子が「国民に愛される、国民に愛される…」と書き方を練習した習字帖、死の直前だった処刑日の午前4時に彼女自身が書いた遺書。美術品ではないにもかかわらず、単なる資料であること以上に訴えかける何かがあったのだ。美術品やそのほかの遺品、資料などで構成して一人の人物を表現したこの展覧会の妙味を実感した。

取材・文・レイアウト＝ド・ソルヒ

### <展覧会情報>

『ヴェルサイユ宮殿<監修> マリー・アントワネット展』  
美術品が語るフランス王妃の真実  
2016年10月25日～2017年2月26日  
森アーツセンターギャラリー (東京・六本木ヒルズ 森タワー 52階)

# 面白まんが「ソドミィ観察圖」



Whoops! [ウープス] 2017 WINTER Vol.15

発行日 = 2017年 01月 07日

編集長 = 小川敦生 (多摩美術大学芸術学科教授)

編集 = 小林真弓、ド・ソルヒ、笹木一平、増田啓志、横山亮、椋田大輝

誌面デザイン = ド・ソルヒ、増田啓志、横山亮、椋田大輝、小川敦生

表紙レイアウト = 横山亮

発行 = 多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ

〒192-0394 東京都八王子市鎌水 2-1723

印刷 = 多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ

問い合わせ先 = aogawageige77@yahoo.co.jp

Twitter @aogawageige77 Webzine「タマガ」 = QRコード

●掲載記事、写真の無断転載を禁じます。

Whoops! について

本誌を手にとっていただき、ありがとうございます。誌名「Whoops!」は、「あっ!」という驚きを表しています。あなたの中で何かが弾けてほしい、刺激的な日々を送ってほしい。そんな思いを込めて制作しました。

お読みいただくうちに小さな「あっ!」が生まれてくれますように!



生誕一〇〇年記念

# 染色家 岡村吉右衛門



— 祈りの徴し —  
しる

100th birth year anniversary exhibition

KICHIEMON OKAMURA the Dyeing Master; Representations of Prayer



蝦夷絵 「大鼻」 型染版画、和紙

2016年 12月17日(土) : ↓ 2017年 2月19日(日)

多摩美術大学美術館